

(続紙 1)

京都大学	博士 (経済学)	氏名	Enkhchimeg Enkhmandakh
論文題目	Mongolian Path of Market Transition: From the Viewpoint of Labour Market (モンゴルにおける市場経済化：労働市場の視点から)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、モンゴルにおける市場経済化が労働市場にもたらした変化について、歴史的経路依存性に依拠した構造転換および、高出生率を背景にした独自の制度変化を分析している。</p> <p>第1章は、本論文の接近方法と問題背景を明らかにしている。モンゴルにおける20世紀に生じた2度の体制転換を歴史的に振り返るとともに、移行経済研究の先行研究の整理を通し、労働市場のシステム変化への適合過程、とりわけ非公式制度を視野におさめかつ労働市場政策と社会政策を結び付けた接近の有効性を提起している。</p> <p>第2章は、市場経済化の初期条件であるモンゴルの社会主義システムを分析し、ソ連とは異なり伝統が強く働く進化過程を明らかにしている。ネグデルと呼ばれる協同組合への集団化及び工業化が著しく遅れて実施され、教育・保健などの公共部門が肥大化し、伝統的遊牧民は体制順応的で、労働市場は国家の政策だけでなく伝統の影響から自由ではなかった。</p> <p>後半の2つの章は、本論文の主題であるモンゴル市場経済化の労働市場に及ぼす影響を詳細に検討している。第3章は、旧ソ連諸国同様に、急速な市場移行にも関わらず労働市場におけるショック（失業）が深刻化しなかったことに注目し、人口減少ではなく、人口増加が続き、社会的な保護機能が後退し、失業が選択されず労働市場からの退出が増加したこと、公共部門の終了が悪化し、かわって農業（遊牧）および市場移行が創出した非公式部門・自営業が受け皿になっていることを明らかにしている。この構造変化は地域間労働者移動を伴うものであり、1990年代における農村人口の増加をもたらしたが、全体としては首都への集中化が促進された。こうした労働市場における変動をGDPの変動と対比させ、2000年代以降の経済回復と気候悪化の影響を受け、農業部門が過剰労働人口の受け皿にならず、サービス部門の就労比重が拡大した。</p> <p>第4章は、移行期の吸収源の非活動人口と非公式雇用に焦点をあてて、モンゴル労働市場の特質を析出している。他の移行経済とは異なり人口増は労働人口を拡大させたが、とくに女性で労働市場からの退出が観察され、その理由として年金生活への移行、育児が観察された。こうした女性の家庭回帰（再家族化）は縮小する公共部門に取り替わることで、2000年代以降出生率が上昇さえ示す要因になっている。モンゴルの非公式部門は登録・納税されるが、公的な社会的保護を受けない存在であり、非公式部門からの所得は増加している。新型コロナウイルス感染症は移行期の労働市場の脆弱性を明らかにしており、女性に対する影響が大きいことも結論付けられている。同時に、社会的給付（育児手当と母親手当）、年金および悪化する公共サービスが退出および非公式化を促す役割を果たした。</p> <p>本論文は、移行経済学においても開発経済学においても顧みられることのなかったモンゴルの労働市場を研究対象として、経路依存的市場経済化のためにモンゴル独自の現象が形成されていることを検証し、これに対し労働市場を公式化する制度化と正常化のためのインフラの再興が不可欠であることを政策提起している。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、モンゴルにおける市場経済化が労働市場にもたらした変化について、歴史的経路依存性に依拠した構造転換および、独自の制度変化を明らかにした意欲的な労作である。体制転換後のモンゴル経済の研究はきわめて少なくかつ、ステレオタイプの遊牧民にだけ光を当てた研究に傾きやすいわが国の研究動向で、本論文の価値は大きい。とくに、丁寧に内外の統計データを収集し、かつ労働市場を対象としつつも社会構造・社会政策に分析視点を広げることで、本論文はきわめて独創的かつ新規さに富む価値ある研究と評価することができる。本論文の学術的貢献は以下の点において高く評価することができる。

第1に、市場経済移行に際して、マクロ経済分析、公式の労働市場分析では見えない構造転換を、社会政策にまで視野を広げることで労働市場の動的な変化を析出することに成功している点があげられる。モンゴル労働市場研究では、初期条件が強く移行過程を制約しており、経済政策だけではなく、既存の制度とそれに対する人びとの適合行動を明らかにすることで、労働市場からの退出と伝統的な遊牧への一時的退避行動を動的に検証している。過剰労働力の受け皿となる、非公式部門の詳細な検討もまたその成果に加えることができよう。

第2に、退出と非公式化の分析において女性労働を取り上げることで、市場移行と政策に反応して「再家族化」現象が生じていることを明らかにしており、その結果本論文はジェンダー研究においても新規さを有している。とくに女性における教育水準の高度化、社会主義システムの遺産である早期年金システムと移行に伴う公共サービスの劣化などが女性を労働市場から押し出す構造は、モンゴルに限定できない政策・制度上の含意を有している。

第3に、そもそもモンゴルは市場移行研究でも開発経済学でもこれまで十分に分析されているとは言い難いなかで、丹念に文献、統計を検討することで、遅れた工業化、遅れた市場経済化がもたらす経済システム、経済制度の特徴を析出しようとした点である。限られた研究と地域研究の狭い接近を、経済学のなかに位置付ける斬新な研究成果とすることができる。

一方、本論文には、以下のように十分に明らかにできず今後取り組むべき研究課題もまた残されている。

第1に、非公式部門とその実態は、モンゴルの固有の状況を反映したものとはいえ、その内容を更に明確化し具体像を提示する余地が残されている。第2に、市場経済移行の独自性を析出するとともに、他の移行経済・アジア諸国との国際比較研究を発展させる余地はあり、それは新たな研究課題を提起するものと言える。第3に、モンゴルの条件下で、経済政策の有効性をどのように担保するのか、政策的含意、すなわち政府の役割の提起もまた今後の研究の発展には求められよう。

以上のような課題を残しているとはいえ、それらは将来に向け研究を発展させるための方向性を示唆するものであり、本論文が解明した貴重な学術的貢献をなんら損なうものではない。

よって、本論文は博士(経済学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和5年(2023年)5月22日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 年 月 日以降